

シューマンの作品

幻想小曲集

ライプツィヒ時代のシューマンにはひとつのジャンルを集中的に作曲する傾向があり、例えば、本曲が書かれた 1842 年は、室内楽作品が集中的に生まれた「室内楽の年」と言われる。ピアノ三重奏のジャンルではシューマンにとって最初の作品だが、繰り返し改訂が加えられ、4 曲からなる《幻想小曲集》というタイトルで出版されたのは、ピアノ三重奏曲第 1 番や第 2 番よりも後の 1850 年であった。

ピアノ三重奏曲 第 1 番

ブラームスの作品とともにドイツ・ロマン派のピアノ三重奏曲の代表作といえるシューマンのピアノ三重奏曲第 1 番は、1847 年 6 月、妻クララの誕生を祝って作曲された。極度の心的疲労による精神疾患で倒れたことをきっかけに、ライプツィヒを離れてドレスデンで活動していた時期である。ドレスデンに移ってからのシューマンは、それまでは独奏楽器になりづらかった楽器の音色や技法を生かした室内楽をいくつも作曲するなど、その可能性を大きく広げ、技法的にも内容的にも深いロマン的叙情性と精神性を作品に付与する円熟期にあった。幻想的な音楽の揺らぎと生き生きした躍動感にあふれた本作は、全 4 楽章からなり、シューマンの室内楽における音楽語法の集大成ともいえる作品である。

ピアノ五重奏曲

ピアノ五重奏曲は、シューマンのもっともよく知られた室内楽曲のひとつで、情熱的なピアノと弦楽四重奏が丁々発止と渡り合う名曲。「室内楽の年」1842年に、わずか数週間のうちに作曲された。翌年には出版され、妻クララに献呈されている。伝統的な 4 楽章構成を採用しており、第 1 楽章はソナタ形式による英雄的な第 1 主題と優雅で叙情的な第 2 主題の対比が特徴的。第 2 楽章は葬送行進曲風、第 3 楽章はトッカータ風の情動的なピアノに先導されたスケルツォ、そして第 4 楽章は第 1 主題と第 1 楽章の主要主題を用いた二重フーガによって締めくくられる。